

マーク・A・マトソン 『ヨハネによる福音書』

高 砂 民 宣・訳

Unit 2 ヨハネ 2 章 1 節～3 章 21 節 しるしと信仰

1 章の物語が進むにつれて、イエスは洗礼者ヨハネと出会ったエルサレム周辺の地域から立ち去り、ガリラヤへと北方に向かって旅をします（1：43）。次の物語はそれに相応しく、ガリラヤ地方のカナという町を舞台としています。私たちはずっと後の21章2節で、ナタナエルがカナの出身であることを知らされます。これはおそらく、1章の終わり近くで語られているナタナエルについての伝承との間に、地理的なつながりを持たせようとしていると思われます。1章の終わり近くでイエスはナタナエルに、彼がもっと偉大なことを見るようになることと約束されました。そしてイエスによるこの最初の「しるし（奇蹟）」が、カナで行われるのです。

カナでの婚礼によって、イエスの宣教活動は新しい段階に入ります。それはしるし（奇蹟）の段階です。イエスの行動は劇的で預言的です。そしてある意味、イエスの本質と任務（mission）を示すことを意図しています。しるし（奇蹟）は証言と同様に、読者を説得してイエスは神の言が受肉した御方であることを信じさせる証拠なのです。

カナでの婚礼（2：1－11）

ヨハネは婚礼の場面を「三日目に」という経時的な指標（the chronological

marker) によって紹介しています。しかしこれは、洗礼者ヨハネと出会ってからの時間について言及しているとは考えられません。既に三日以上経っていることは、特に1章からも明かです。(ガリラヤへ行くのに予想される時間を足すならば、最低四日、もしくはもっと長い時間掛かるでしょう。) この用語を、三日目の復活というふうに、象徴的に解釈しようという気持ちにもなりますが、物語の前後関係から判断すると、行き過ぎのように思われます。「三日目」というのは、イエスがナタナエルに、もっと偉大なしるしを見るであろうと約束した時から、まだそれほど時間が経っていないことを示すために用いられているのだと思われます。時間の指標 (the time marker) は、もしかすると弟子たちを、これから起こる婚礼の物語とつなぎ合わせるためのものかもしれません。弟子たちがイエスと共に婚礼に招かれたということは、続いて起こる物語の展開にとって重要です。なぜなら物語の焦点は、究極においては奇蹟に対する弟子たちの反応にあるからです。

このしるしの舞台は婚礼であり、ヨハネ福音書だけに記されているものです。福音書の著者はイエスの生涯を聖書の視点から解釈するので、結婚という舞台は、ヨハネにとっては特別な意味があるかもしれません。ホセア書2章21～22節、イザヤ書25章6～8節、およびエレミヤ書2章2節が示すように、婚礼はよく、メシアの時代が到来する徴と理解されました。

婚礼の祝宴という舞台は、その箇所には何らかの意味での実現を読みこませるかもしれませんが、その箇所の他の面に寓意的な意味を付け加えないように用心しなければなりません。この箇所の焦点は主に、力強いしるし (奇蹟) を行うイエスにあります。イエスがユダヤ教の清めの行為 (すなわち、ミクアー、或いは浸礼の池) に使われる石の水がめを用いているという事実は、とにかくイエスがユダヤ教に取って代わろうとしていることを示す徴であると指摘されてきました。しかし石の水がめは、奇蹟が起きる切っ掛けの単なる一部に過ぎず、物語をユダヤ教の清めの儀式と関連させて判断することは出来ません。石の水がめへの言及は、水がめが大きな容器であり、産出した葡萄酒の量がとても多く多いことを示しているに過ぎないかもしれません。

物語そのものはまったく平明で、奇跡的なものです。婚礼の祝宴で葡萄酒が無くなってしまい、イエスの母がそのことを彼に知らせます。イエスに対するマリアの言葉は、何かをして欲しいと頼む表現ではありませんが、それとなく頼んでいるように思われます。するとイエスは、石の水がめを水で一杯にするよう指図することにより、マリアの言葉に応答しています。そしてその水を飲んでみると、美味しい葡萄酒になっていたのです。これにより、弟子たちはイエスを信じます。

イエスの母は、この記事の冒頭では中心人物として紹介されますが、その後は熱情的にも感傷的にも描写されていません。ヨハネ福音書は、イエスの母を決して「マリア」とは呼びません。ヨハネ福音書の興味深い特徴の一つは、イエスの母が福音書の始めの方と終わりの方にのみ登場する点にあります。彼女は最初の奇蹟物語で主要な登場人物として現れ、福音書の最後のほうでイエスが十字架に架けられている時（ヨハネ19：25～26）に再び登場するのです。どちらの場合も、彼女は弟子たちと親しい関係にある存在として描かれています。そしてカナで起きたこの物語でも、イエスと彼の母、兄弟たち、弟子たちが一緒にカファルナウムへと出発したところで物語が終わっていることを見出します。しかし、イエスの母と弟子たちは結び付けられていますが、弟子たちは明瞭に描写されているのに対し、彼女の役割は少し曖昧に描かれています。

イエスの母についてのこの曖昧な描写は、特に彼女とイエスとの会話に見受けられます。イエスの母が彼に葡萄酒が無くなったことを知らせると、イエスは「わたしとどんなかわりがあるのです？」(2：4)と答えています。この句は訳すのに難しい言葉です。逐語的に訳すと、「私とあなたにとって何ですか」となります。この句はまた、「あなたが私にこれを持って来なければならないほど、私はあなたに何かをしましたか」という意味にもとれます。この場合、イエスと母との間に強烈な不和があったことを示すことにもなります。しかし文脈から判断すると、この意味を指しているとは思われません。そうではなく、「あなたは何故このことで私を煩わすのですか」という、距離を置いた穏やかな描写を意味していると思われるかもしれません。あるいは、RSV (Revised Standard

Version) が解釈するように、「婦人よ、私と何の関わりがあるのですか」といった、一般的に言われているイエスと母との関係であるかもしれません。そしてこの翻訳が示すように、母に対するイエスの呼び掛けは、「婦人よ (Woman)」となっています。これはイエスが女性に呼び掛ける時の常套句であることは、ヨハネ福音書において (4 : 21、8 : 10、20 : 13、および19 : 26に記されたイエスの母への呼び掛けともう一度比較せよ)、また他の福音書においても知られています。しかし息子が母に呼び掛けるにとしては、少々堅苦しいように思われます。母からの知らせに対する反応および母への呼び掛けは、両方とも母との間に距離を置いてイエスを描写しているのです。

イエスと母との会話でもう一つ混乱してしまうのは、「わたしの時はまだ来ていません」(2 : 4) というイエスの言葉です。第四福音書では、「わたしの時」、或いは「時」といった用語は、しばしば将来の決定的な時、特にイエスの栄光が明らかになる受難に言及する時に用いられています (例えば、ヨハネ 7 : 30、8 : 20、12 : 23、27、13 : 1、17 : 1を見よ)。もっとも、カナの婚礼という文脈の中で用いられていますが、「わたしの時」という用語はやや混乱を招いてしまいます。イエスは、「今はわたしを煩わせないでください。わたしの栄光の時はまだ来ていないのですから」と言っているのでしょうか。栄光の時というのが、イエスが自分の力を示す時であるならば、イエスは何故ここや他の場所でも奇跡を行い続けたのでしょうか。そして第四福音書記者は、続けて言います。この奇跡は確かに、イエスの栄光を示している、と。そうすると、どうしてこれは「彼の時」ではないのでしょうか。

イエスと母の会話と、その後に続く行動との間には、明らかな断絶があります。イエスは言葉をそらしたにもかかわらず、彼の母は、イエスが召使たちに伝えることは全てそのとおりにするよう、彼らに伝えることによって行動を始めます。そしてイエスは召使たちに、水がめに水を一杯に入れて、宴会の世話役のところへ持って行くように指図を始めます。イエスの母とイエスは、距離を置いた言葉を語っているにもかかわらず、母親と息子として、お互いに応答しています。イエスによる母とのやり取りと、その後に続いたこととのつなが

りの無さは、登場人物たちが二つの異なる仕方においてイエスに応答していることを示していると思われます。一方でイエスは彼の母が頼んだように婚礼の祝宴の面倒を見ることにより、(イエスの母ではなく) 弟子たちが彼を信じるようになるという功績を受けています。他方、イエスの母と彼女の息子との関係は信仰や師弟関係というものではなく、彼女の役割は単に、弟子となる可能性はあるがまだそうなるにいたっていない「婦人」という役割にすぎません。おそらくこの会話は十字架を、すなわちイエスが彼女の世話を愛弟子に委託する時を予期しているのだと思われます。― 弟子としてのみ、信じる者としてのみ、彼女は命を受けるのです。

ジェラルド・スローヤンは彼が著した現代聖書注解シリーズの注解書の中で、「別言すれば、ただイエスに対する神の要求のみが心に留められなければならない。それから(マリアによって) 求められた行為がなされる。… 出来事の決定は、人間ではなく常に神の御手のうちにあるということを、イエスは4節で述べているように思える」と述べています。このように、「婦人よ、わたしとどんなかわりがあるのです。わたしの時はまだ来ていません」というイエスの問いと言葉は、この奇跡とのつながりの無さを意味しており、その代わりにイエスの母が弟子たちの交わりの中に入って来る十字架を予期しているのです。

イエスによる母との会話以上に、この箇所の焦点は、イエスが「しるし」を自発的に行っている点にあります。これが「彼が行った最初のしるし」であるカナでの奇跡について、ヨハネが明白に語る仕方です。しるしは、何か他のものに起こることを指しているというよりも、もっと重要な何かを指しています。カナでのイエスによる奇跡は、彼ご自身のアイデンティティーを指しているのです。著者は、このしるしによってイエスが「ご自身の栄光を顕した」ことを指摘しており、これが第四福音書において鍵となるテーマなのです。ご自身の栄光を示すことにより、イエスは彼こそが先在の言、神の子であることを実際に示しているのです。

「栄光」(或いは「輝き」) という言葉は、ヨハネでは広い範囲に亘って使用さ

れており、非常な力強さをもっています。この言葉には、神ご自身の存在の強さの概念が、暗に示されています。この例として、シナイ山では、神の御前から出て来た後もモーセの顔に栄光の残像が残っていたことから、神の存在は神の民の間では「主の栄光」と呼ばれました（出エジプト記24：15～17、34：29～35）。このように栄光とは、神の存在を意味しているのです。イエスはご自分の神性を顕す場合にご自身の栄光を示し、受難の後で死から甦られた時、最終的に「栄光をお受けになりました」（栄光を纏われました）。

しかし、カナにおけるこのしるしの驚くべき結果は、イエスの弟子たちが彼を信じるようになったことです。物語の結論で、このしるしや全てのしるしについて、重要な点が語られています。すなわち、全てのしるしがイエスのアイデンティティーを証しし、この証しに基づいて、特定の人々がイエスを信じるようになるのです。第四福音書の始めから終わりまで、しるしはイエスの神性を示しています。しかし、しるしは、しるしを見たいと思う人、イエスのアイデンティティーを信じた人々によってのみ理解されるのです。

神殿での出来事（2：13～25）

第四福音書は、神殿での出来事をイエスの伝道の初期に配置することにより、再び独特なアプローチを示します。他の全ての福音書では、神殿におけるこの破壊行為は、イエスの生涯の最後の週、エルサレム入城の直後に起こっています。他の福音書と同様に、ヨハネにおいても背景は過越祭の週となっています。しかしヨハネ福音書は、過越祭のためにイエスはエルサレムに何度も行ったことを知っているように思われます。こうして、他の福音書においてはイエスの伝道活動が1年であるように見えるにもかかわらず、ヨハネ福音書は、伝道活動を短くても3年というふうに描いているのです。イエスの生涯についてのより良い情報をヨハネが記録しているという可能性はあります。他の福音書はいずれも、エルサレム訪問を一度のみ、すなわちイエスが死ぬことになる時の訪問しか記録していません。最初の三つの福音書（マタイ、マルコ、

ルカ)における短い伝道期間は、まずガリラヤでの教えと、次にエルサレムでの死に焦点を合わせることによって、イエスの伝道活動を簡略化したことから生じた結果であると思われます。それゆえ、これらの他の福音書は神殿での出来事を、一年間の伝道期間という与えられた型に沿うように、イエスが神殿を訪れた唯一の機会に圧縮したと思われます。しかし、おそらくヨハネもまた、神学的な主張を示すために、神殿での出来事を初めの方に移動させたと思われます。どちらにしても、神殿での出来事が実際にはいつ起こったのかについては、確固とした考えは無いままの状態です。しかし第四福音書においては、神殿での激論がユダヤ教の指導者層との衝突の始まりを示し、このように福音書の始めの方で闘争の主題を与えることにより、物語の道筋を決めるのに役立っているのです。

過越祭は、厳格なユダヤ教徒にとっては、エルサレムに詣でるべき三つの聖なる祝祭のうちの一つでした。過越祭、仮庵祭、および七週祭（五旬祭、ペンテコステ）は、エルサレムで行われる祝祭として、旧約聖書に明白に述べられています（レビ記23章）。そしてヨハネ福音書は、過越祭の時（ヨハネ2：13、6：4、11：55）、仮庵祭の時（ヨハネ7：10）、そして神殿奉献記念祭の時も同様に（ヨハネ10：22）、イエスをエルサレムに滞在させています。ヨハネがペンテコステに言及しているという可能性はあり得ます（ヨハネ5：1の「祭り」を参照せよ）。それゆえ、ヨハネはイエスのことを、祭りの度にエルサレムへ定期的に旅をする厳格なユダヤ人であったと理解しています。この事実のみが、イエスがエルサレムとガリラヤの間を行ったり来たりするという本福音書の地理的特徴を説明できるのです。

この出来事が、しばしば神殿の「清め」と呼ばれてきたのは不幸なことです。出来事それ自体、或いは中断させられた慣例には、「不浄なこと」が起こっているのをイエスが見たことを示すものではありません。神殿の慣例では、かなりの数の犠牲の動物が、生贄に必要とされました。巡礼者たちが遠方から来たならば、動物と一緒に連れてくることは非現実的なことであり、律法が要求する汚れの無い動物を必ずしも常時持つてはいなかったかもしれません。そ

れゆえ、神殿で犠牲の動物を献げる制度を維持するためには、動物の販売はやむをえないことだったのです。そしてまた、神殿税が要求され、それもローマの貨幣ではなく、ティルスの貨幣で払わねばなりませんでした。これらの動物と貨幣は、神殿の聖職者によって高い利益で売られており、このように、腐敗した慣例と関係していたことを示しています。しかし本文には、不当な利益を得ていることを非難する文章は見られません。

その代わり、神殿におけるイエスの行動は、預言的な行為を示しています。両替人の台を倒し、商人と彼らの動物を追い出すことにより、神殿礼拝を支えていた活動を、イエスは象徴的に粉碎したのです。さらに、倒したり追い出すといった行為は、近い将来に起こる暴力による神殿の破壊と、境内からの人々の追放を示しているように思われます。第四福音書記者は、イエスの行為と神殿の崩壊とを明白に連結させています。神殿で何故このような行為をするのか説明するしるしを見せよと求められた時（ヨハネ2：18）、イエスは「この神殿を壊してみよ。三日で立て直してみせる」と言いました。「これに対するイエスの答えは、ヨハネ独自の苦難の予言である」とスローヤンは述べています（93ページ）。弟子たちは、イエスが復活された後、これはイエスの体のことだったのだ — これこそがこの行為の意味のひとつであったのだと理解するようになります。イエスが言われた言葉は、信仰の目を通して、事実の後に理解される別のしるしとなります。キリスト教の神学では、イエスの体 — 教会 — は、人間の手で作られたのではない新しい神殿となります（マルコ14：58参照）。しかし神殿自体もまた、紀元70年に破壊されます。それゆえ、イエスのしるしは彼自身の死と共に、神殿の破壊をも予期しているのです。

「ユダヤ人たち」

「ユダヤ人たち」がここで紹介され、イエスとの衝突が幾つか見られるのは、物語の発展のために重要なことです。序文で触れたように、「ユダヤ人たち」という用語は、ユダヤ教の中で、イエスと彼の伝道に対して積極的に反対する人々について言及する際にヨハネ福音書が用いる語であり、全てのユダヤ人や

イスラエルの全民族を指している用語ではありません。

すると私たちは、「これらの『ユダヤ人たち』とは誰のことですか？ ガリラヤの人々とは対照的に、ユダヤに住む人々（しばしば「ユダヤ人たち」という用語はこのように翻訳されている）がイエスに反対していることを、ヨハネは暗示しているのですか？」と尋ねるかもしれません。確かにそうだとすれば、「ユダヤ人たち」という用語を用いても、すべてのユダヤ教徒をイエスに敵対し、イエスの死と関連する存在と見なすことはなくなるでしょう。しかし、本文はそうした用法をほとんど支持していません。全てのユダヤ人がイエスに対立したのではなく、「ユダヤ人たち」という語は、ガリラヤを舞台としている場合にも使われています。あるいは、「ユダヤ人たち」というのは、ユダヤ民族の宗教的、信仰的指導者たちなのでしょうか。この考えが、ヨハネの見解と近いように思われます。なぜならば、「ユダヤ人たち」という用語は、しばしばファリサイ派の人々や祭司長たちと密接に関連しているからです。しかしここでも、「ユダヤ人たち」とファリサイ派の人々や祭司長たちとを等しいと考えるのは困難です。これらの間に明らかにある種の関係があるとしても、ヨハネは時々、この用語を敢えて異なる仕方を用いています。

「ユダヤ人たち」というヨハネの用語は、イエスに反対し、イエスをメシアと考えることを積極的に拒絶し、イエスの声と証言を積極的に黙らせようとしているイスラエルの人々を指すと見なすのが、より望ましいと思われます。ヨハネは宗教的な指導者たちを、イエスの反対勢力の主要な一員であると理解しています。しかしこの「ユダヤ人たち」は、何らかの特定の地理的ないし政治的な集団を指してはいません。

神殿の破壊を預言的に告知した神殿での行為と共に、イエスに敵対する者が現れます。これらの敵対者たちは、イエスに対する反対を声高に叫び、強調するようになっていきます。これが物語の不可欠な部分です。「彼は自分の民のところへ来たが、民は受け入れなかった。」（ヨハネ1：11）。ヨハネ福音書ではこの対立が、イエスの伝道の初期にもう始まっているのです。

ニコデモとの対話（3：1～21）

ニコデモは第四福音書に3回姿を現します。彼はここ、本福音書にある最初の長い対話の場面に現れます。彼は再び、神殿の守衛たちがイエスを捕らえようとした時に現れ（ヨハネ7：45～52）、最後はイエスの死後、墓に現れます（ヨハネ19：39）。私たちはニコデモをどのように理解すべきか分かりません。彼は一方で、ユダヤ人の議會を導くメンバーの一人であり、それゆえ最終的にはイエスを捕らえて殺した会議の一員なのです。他方、イエスとの対話やファリサイ派の人々との議論が示していると思われるように、彼はいくぶんイエスに心を開いているように見えます。ニコデモのことを隠れた弟子と呼ぶのは言い過ぎかもしれませんが、彼についての描写はユダヤ人の指導者でさえ幾らかイエスを受け入れていたかもしれないということを示しています。ニコデモが最後の場面で埋葬のために香料を持って来たのは、おそらく彼が遅まきながらイエスをメシアと認めたことを暗示していると思われます。しかしテキストは決してそのことを明らかにしたり述べたりはしていません。その代わり、ニコデモは最後まで、私たちが考え続け、問い続けるような謎の人物であり続けるのです。

ニコデモの物語は、夜間の訪問によって始まります。たぶんこれは、彼が他の「ユダヤ人たち」の反応を恐れたからでしょう。おそらく夜というのは、ユダヤ教の指導的地位を覆っている精神的な闇を意味していると思われます。第四福音書記者は序章（プロローグ）において、イエスが来られたことを、光が闇の中に入って来たことと解釈しています。それゆえ、ここで夜というのは、何らかの精神的抑圧感を意味しているのかもしれませんが。そして、あたかもニコデモをイエスのもとに連れて来た夜の覆いの精神的な特質を強調するように、ニコデモに対するイエスの言葉は、この闇／光という隠喩を展開させているのです。

光が世に来たのに、人々はその行いが悪いので、光よりも闇の方を好ん

だ。それが、もう裁きになっている。悪を行う者は皆、光を憎み、その行いが明るみに出されるのを恐れて、光の方に来ないからである。しかし、真理を行う者は光の方に来る。その行いが神に導かれてなされたということが、明らかになるために。

(3: 19～21)

ニコデモの初めの問いは、彼がイエスのことを特別な神の使者と見なす用意ができていたことを意味しているように思われます。イエスが行った数々のしるしは、神に由来するものであるに違いない、とニコデモは考えたと思われます。しかし、問答によって生じた結果は、その代わりに誤解と間違った理解を示すことになりました。ニコデモの問いに対する応答の中で、人は新しく／上から生まれなければ、神の国を見ることはできないと、イエスが答えたのに対して、ニコデモはイエスの言葉を間違って解釈しています。イエスの最後の言葉は、ニコデモの無理解を霊的な無知と信仰の欠如というふうに解釈しています。イエスを、或いは彼の証言を受け入れなかった者として、暗黙の非難のみを残して、ニコデモは最後に自分の言葉を述べることなく、その場を去っていきます。

誤解の根拠は「再び生まれる」という表現に用いられている句が二重の意味を持っていることにあります。「生まれる」という動詞を修飾するアノーセンというギリシア語の副詞は、二つの意味を持っています。ニコデモが解釈したように「再び」を意味すると共に、「上から」という意味もあるのです。イエスが示すのは後者の意味であり（「新たに生まれなければ」神の国に入ることは出来ない、と主張する（車の）バンパーステッカーに反して）、この後に続く、天上のことを話す天から来る者（3: 12～13参照）についての議論の根拠となっています。彼は「上から」来るのであり、彼は他者を「上から」生まれさせる霊を携えているのです。

ニコデモの無理解に応答している間、イエスは福音書の鍵となる神学上の概念、決定的である概念のいくつかを、彼自身の言葉で紹介しています。イエスは、自分を信じる全ての人々に永遠の命をもたらすために来たと言っていま

す。この声明は、言が命の創造者（author）であるという、プロローグで持ち出された主題を更に詳しく説明しています。言が肉となったイエスは、今や永遠の命として、永遠にその命をもたらすために来たのです。

イエスを信じるすべての人に永遠の命が与えられるというこのテーマは、福音書の至る所で繰り返され、なじみ深いものとなっています。そしてイエスを信じるという概念は既に紹介されていますが、イエスの言葉は信仰が決定的に大切であることを強調しています。信じる者は永遠の命を持ち、裁かれることは無いのです。けれども信じない者は、永遠の命を与えられず、彼らの行いによって既に裁かれているのです。イエスの根本的で独特の性質が今や明らかにされました。彼は序章（プロローグ）において、「唯一（神から）生まれた」御子であると見なされました。今やその唯一性に、機能的な特質まで与えられました。 — この唯一の御子を信じることを通してのみ、永遠の命は人類に与えられるのです。

[?] さらに深く考えるための問い

1. イエスと母の会話について話し合ってみましょう。イエスとマリアはよそよそしく見えますか？よそよそしく見えるのは何故でしょうか、或いは、よそよそしく見えないのは何故でしょうか？

2. このスタディ版の著者は、神殿での出来事が「清め」というレッテルを貼られてきたことは不運だと言っています。あなたは同意しますか、それとも同意しませんか？もしも清めでなかったならばそれはどんなタイプの行為だったのでしょうか？

3. このスタディ版の著者は、ヨハネが用いている「ユダヤ人たち」という句を、全てのユダヤ人、或いはユダヤ教全体というように、文字どおりに受け取ってはならないと記しています。大雑把な一般化が、ある特定の人々のグループになされた現代の実例を、あなたは思いつきますか？あるとすれば、それはどのように有害ですか？

4. ニコデモの性格と動機について、多くの推測がありました。あなたは彼

をどう考えますか？彼はその後、どうなったと思いますか？

訳稿に関し、日本キリスト教団出版局の土肥研一氏から適切なお助言を頂いた。ここに感謝の意を表したい。